

災害伝承における当事者性とフィクション性に関する一考察

東洋大学理工学部 学生会員 ○藤川誠司
東洋大学理工学部 正会員 及川 康

1. 問題意識（当事者性の獲得）

災害伝承の第一義的な効果は、その災害の非当事者において生じる。受け取った知識の多寡でその効果を定義するなら、哲学者パウロ・フレイレ¹⁾が現代の詰め込み型教育を「銀行型教育」というフレーズで痛烈に批判したのと同様の構図で、非当事者は伝承によって知識が貯蓄されていく銀行口座に擬えられよう。知識の忘却は貯蓄の枯渇であり、それはそのまま伝承の効果の滅失を意味することになる。そのような世界観は教育効果に関するフレイレの見通しの本意ではけっしてない。本意はおそらく、「教師のような生徒／生徒のような教師」という概念からも容易に連想されるとおり、教師と生徒を区分する境界線の一時的な融解を契機とした、生徒自身の主体性の「再構築」および「変化」にあると言ってよい。これと同様に、災害伝承の効果をめぐるも、非当事者における一時的な「当事者性の獲得」を契機とした、非当事者の主体性の「再構築」および「変化」に焦点を置くべきであろう。

非当事者が当事者になることなど絶対にあり得ない。そこには絶対的な隔たりが存在する。その隔たりをたとえ一時的にでも乗り越えて「当事者性を獲得」するには、客観的な「事実」(non-fiction)の認識を重ねるだけの伝承では限界がある。そこには、「当事者はこうだったかもしれない」などと想像する「創作」(fiction)とも呼ぶべき作業が必要である。それは悪

意を含む「捏造 (made-up)」や「空想 (imaginary)」とはニュアンスが異なる。野家啓一の「物語の哲学」²⁾や千野帽子の「人はなぜ物語を求めるのか」³⁾が言及するように、ほとんどの人の日常的な認知活動の大半がこの「創作」で占められているといっても過言ではない。ただし、災害伝承におけるこの「創作」の作業は、じゅうぶんな想像力を体得する非当事者ならば比較的容易であろうが、そうではない非当事者においてはそれをサポートする何らかの工夫があってもよいだろう。

2. リアス・アーク美術館

このような問題意識のもと、非当事者における一時的な「当事者性の獲得」は如何なる方法で実現し得るのかを考える際、宮城県気仙沼市にあるリアス・アーク美術館の常設展示「東日本大震災の記憶と津波の災害史」の取り組みは示唆に富む。この美術館では、被災した物品を「被災物」と呼称して収集し、写真-1のように館内に展示している。被災物の傍らには表-1のような短いストーリーが添えられているが、これは全て学芸員が被災者と語り合う中で創作したストーリーである。美術館側は、博物館学的にも展示学的にもタブーであることを踏まえつつ、ストーリーを、被災物を普遍化させ、被災物を観た非当事者が自らの境遇に置き換えて当事者に思いを馳せやすくするための補助として位置づけ、このような取り組みを行っているという⁴⁾。前述の問題意識に照らせば、つまりこれは、



写真-1 被災物の一例（炊飯器）

表-1 「炊飯器」に添えられたストーリー

平成元年ころに買った炊飯器なの。
じいちゃん、ばあちゃん、わたし、お父さんと息子 2 人に娘 1 人の 7 人だもの。
だから 8 合炊き買ったの。それでも足りないくらいでね。
今はね、お父さんと 2 人だけど、お盆とお正月は子供たち、孫連れて帰ってくるから、やっぱり 8 合炊きは必要なの。普段は 2 人分だけど、夜のみまで朝に 6 合、まとめて炊くの。
裏の竹やぶで炊飯器見つけて、フタ開けてみたら、真っ黒いへドロが詰まったの。それ捨てたらね、一緒に真っ白いごはんが出てきたのね……
夜の分、残してたの…
涙出たよ

キーワード：災害伝承，当事者性の獲得，ストーリー，フィクション，リアス・アーク美術館

連絡先：〒350-8585 埼玉県川越市鯨井 2100 東洋大学理工学部都市環境デザイン学科, Tel: 049-239-1407, E-mail: oikawa053@toyo.jp

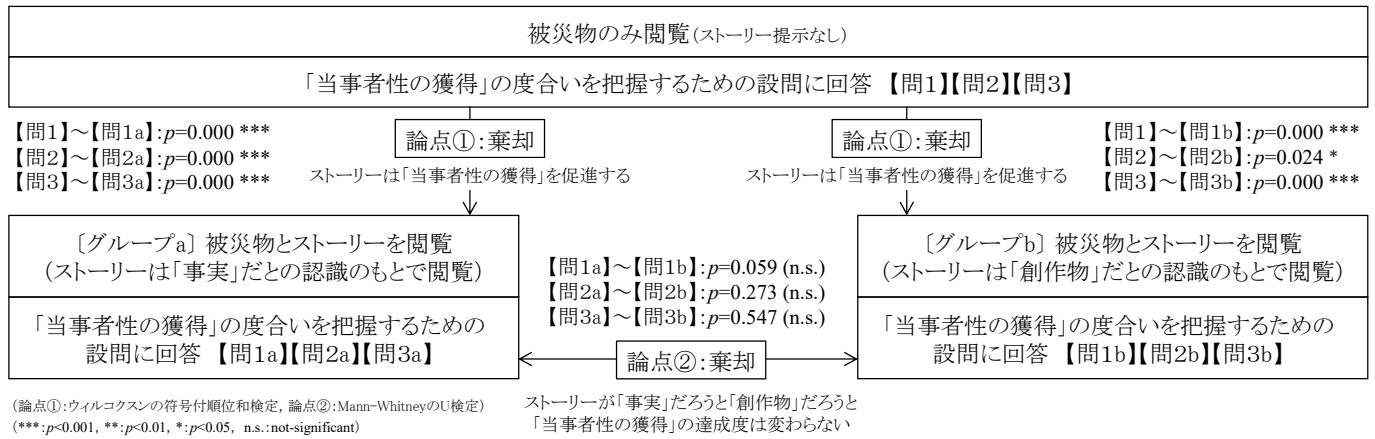


図-1 調査の手順，論点①②の位置づけ，および検証結果

表-2 調査概要

実施日	2023年7月26日
対象者	東洋大学理工学部の学生を対象とした開講科目の履修者(有効回答79票)
「当事者性の獲得」の度合いを把握するための設問内容(要約) 問1: 物品とその所有者の「日常の風景」を具体的にイメージできたか 問2: 東日本大震災という出来事を「自分の身」に置き換えて感じる事ができたか 問3: 東日本大震災という出来事による当事者の「悲しみ」を感じる事ができたか	

「当事者はこうでした」という「事実」を提示するのではなく、非当事者が「当事者はこうだったかもしれない」と想像する創作作業をサポートする工夫であるといえよう。

3. ストーリーの効果と事実/創作物の差異

しかし、この取り組みに対して外部からは「捏造だ」という批判や揶揄があったという⁵⁾。これらの批判や揶揄は「事実のみに意義や効果があり、創作物にはない」という主旨と読み取られるが、もしこれらの批判や揶揄が正当なものであるならば、以下のような論点が支持される必要がある。

論点①: ここに添えられたストーリーを閲覧したところで非当事者の「当事者性の獲得」は何ら促進されないはずである。

論点②: ここに添えられたストーリーが「創作物」だとの認識のもとで閲覧する場合のほうが、「事実」だとの認識のもとで閲覧する場合よりも、非当事者の「当事者性の獲得」は達成されにくいはずである。

これらの論点を検証するため、表-2にその概要を示す調査を行った。まず、調査対象者を〔グループa〕と〔グループb〕に分け、両グループにリアス・アーク美術館で実際に展示されている被災物の中から5つの

被災物を写真にて閲覧してもらう。閲覧後に「当事者性の獲得」の度合いを測定する(問1~3に回答)。続いて、両グループに先程と同じ5つの被災物の写真と、各被災物に添えられている短いストーリー⁴⁾を提示し、閲覧してもらう。この際、〔グループa〕ではストーリーについて何も伝えずに(事実であるという暗黙の前提のもと)、〔グループb〕ではストーリーが創作物であると伝えた上で、それぞれ閲覧してもらう。閲覧後は再び同じ設問(問1~3)に回答を要請し、ストーリー閲覧後の「当事者性の獲得」の度合いを測定する。

その結果、図-1に示すとおり、論点①と論点②ともに棄却され、前述の批判や揶揄は正当なものとは言えない可能性が示唆された。事実か創作物を問わず何らかのストーリーがある場合の方が、ストーリーがない場合よりも「当事者性の獲得」の度合いが高くなる、ということである。リアス・アーク美術館での取り組みは、ひとつの事例に過ぎないものの、非当事者における災害伝承の効果という観点で一定の役割を果たし得ることがあらためて示唆されたといえよう。

4. おわりに

本稿での検討作業は、あくまで「当事者性の獲得」の度合いを測定したものに過ぎず、それが非当事者の主体性の再構築や変化を介して実際の行動としてどれほど具現化するのかについては未検討のままである。この点に関するさらなる検証が求められよう。

参考文献

- 1) パウロ・フレイレ: 被抑圧者の教育学(50周年記念版), 亜紀書房, 2018.
- 2) 野家啓一: 物語の哲学, 岩波現代文庫, 2005.
- 3) 千野帽子: 人はなぜ物語を求めるのか, ちくまプリマ新書, 2017.
- 4) リアス・アーク美術館: リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史, 2020.
- 5) tbc 東北放送: 「ごみじゃない」破壊された家財道具を展示する美術館長「がれき」と呼ばれたくないワケとは?: <https://newsdig.tbs.co.jp/articles/tbc/332899?display=1>, (2024年1月11日閲覧)